

「負ける」ということ

寺島珠雄

読書新聞の書評をやっと書いたところである。そこに述べた私の考えが、前から『イオム』に送ろうとしていた原稿につながってくるので、つづけて書く。

——勝つと思うな 思えば負けよ……

これは美空ひばりか村田英雄かの唄の文句だが、この半年ぐらゐの間、私はよくこの文句を思い浮べる。そんなふうにしてくれたのは京都の西村修である。

ある夜、西村が大阪にあらわれて一緒に飲んだ。すでに西村は酩酊的だったが、私に向って、「勝つと思つてやっているとしようね」という意味のことを言った。彼の問いには、あえて運動とは表現しないでおくが、いろんなそれらしきことにかかわるについては、その勝利を究極的に信じ、想定しているのであろうな？ という内容があるのだった。

そして私は、「いや負けると思ってるさ」と簡単に答

えた。西村がカラミはじめたのはそれからで、カランでくるかと思えば独語ふうな慨嘆もしたりで、いささかるさいが面白くもあった。一緒にいた岩田秀一が、いちばん若いのに（若いから、か）、しきりと調停を試みてくれたが、それも面白かった。

ところで、私が書いたばかりの書評は『実録釜ヶ崎・山谷闘争／やられたらやりかえせ』という本で、両地域の自由労働者のここ二、三年の闘争過程で配布されたビラ、パンフなどを、闘争を推進した釜ヶ崎、山谷現闘委が編集したものである（田畑書店刊）。

それには「流動的下層労働者」また「非八市民」的労働者」の「現場闘争」がなまなましくあらわれている。私はそういう本を批評した最後に、次のようなことを述べたのだ。

流動的下層労働者が主として経済上に上（中）層化してゆくことはいいとして、それには流動の定着化も伴なうのであるか？ もう一つは、非経済的な側面での労働の階層化の固着（特定職業への侮蔑、差別の現存）をどうぶちやぶってゆくのか？ と。

少し説明してみよう。

釜ヶ崎・山谷などの流動的下層労働者群の存在は、いま

のところ、資本主義体制が使い棄てのために造出する安価な労働者というふうに分断されている。たしかに、大筋はそうである。つまり流動は初発は可視・不可視の強制によっているというわけだ。

だがそれですべてが割り切れはしない。

主体的に流動を志向する層も、いまは明らかにある。たとえばヒッピーと呼ばれるような層、たとえばいわゆるアルバイトの断続で生活する層がまずそれだ。また可視・不可視の強制で流動化した者のなかに、流動を主体的なものに変換・享受している者も少なくはない。こうした流動が、経済的な上（中）層化に伴って、またはその引替えに、制度的な定着を呼びこむのであるなら、資本主義体制下の流動が大筋において外からの強制であるということと現象としてそう変らない。むしろ悪化ですらあり得る例は既に「社会主義」諸国にある。

もう一つの方は、たとえば糞尿処理、塵芥処理、死体処理、肉獣屠殺などを極として、土工などもその範疇に入れられているいわゆる賤業が、賤業から「貴業」になるか、いや賤業視から脱するかどうかである。

体制という言葉をかりに使うと、どんな体制がいま私の述べた疑問を解決することになるか、アナキズムの説

くところもふくめて私には想像できない。

西村が「勝つ」といったのが、アナキズム社会の実現という意味であることは、彼の言葉になくともその場の雰囲気ではしかであった。だから私は、そう理解した上で「負けると思ってる」と答えたのである。ただアマノジャク的にいったのではなく、私なりの考え方が底にあったのは説明した通りだ。しかし私はこの文章では説明したが、西村には「負けると思ってる」といい放っただけだったから、彼がカランできたのは無理もないとカマレながら思い、いまもそう思っている。

経済的上昇はけっこうだが、その引替えが流動の放棄、定着の受けいれであってはたまらない、この気持が私には強い。しかし、たとえば「世界コミュニケーション連合の獲得」された状態において、労働者の、ひいては人間の流動、あるいは意志的放浪というようなことがどうなるのかを考えると、私は自分の気持に対して悲観的な判定を抱かざるを得ない。

同様に、今日ウソツパチが歴然としている「職業に貴賤なし」の教訓が、消滅も廃絶もされないとした私の想像力は働かない。つまり依然として、職業の貴賤は残るのじゃないかと思う。で、貴賤が残るなら、経済的な上

下関係もやっぱり存在するのではないかという疑いも残る。

私はこのような、自分の想像力の限界のなかで、西村に「負ける」と答えた。そして私は、負けるのであるからこそ、反抗や反逆は常に現在しなければ、と考えるのだ。それは『やられたら やりかえせ』に見る幾多の「現場闘争」が、常に個別・具体的であり、同時に局部・限的であって、だから大いに勝たねばならぬのだが、かりに連戦連勝したとしても、究極的に勝つことと同じではないのと大分似ているかもしれない。

さきに書いた「世界コムニオン連合の獲得」という言葉は、目下進行中の日本無政府主義者連盟(仮称)の規約の仮草案のようなものから借りたのだが、そこにはつづけて「究極の目的」が即ちその獲得だという意味が書かれてあり、私はこの場合、そうした表現しかとり得ないだろうと認めながらなお、「世界コムニオン連合」からはみ出す自分を、「負けると思ってる」という風にいうしかなかったのである。ひどく速いような、言葉遊びにすぎぬようなことに拘泥しながら、私は個別・具体と局部・時限をもっとも大切にしたい。(74・9・26)

向井孝著 (六〇〇円・青鞞房発行)
山鹿泰治ノ人とその生涯

エスベラントとアナキズムを一体のものとして、七十八年の生涯を生きぬいた山鹿泰治の評伝(一八〇枚)彼は日本と中国のアナキズム運動の消長とともに歩みながら、自らは終始一印刷工として生活日常から遊離することがなかった。山鹿泰治にあっては、生活者としての微視性こそが、国際性をもった壮大華麗な革命的夢の巨視性を作り出した……

相沢尙夫編著 (一五〇〇円・海燕書房)
日本無政府共産党

……私がいま無政府共産党に注目するのは、無政府共産党こそアナキズムに発しながらそのイデオロギー的呪縛をこえて社会革命を追求しようとした数少ない先駆的運動の一つであったと考えるからである。われわれはこの先人の苦闘の跡を、涸渇したイデオロギーによって切り刻むのではなく、われわれ自身の未来を切り拓く媒介として今日に生かすべきではないだろうか。(蓮台寺晋/本書解説より)

大正十二年関東大震災の折、私は早稲田大学に入っただけで、猿樂町のでんぶら屋の二階に下宿していた。家主のおやしが階下から、「杉藤さん昼飯だよ」と呼んだのに「はい」と答えて階段を一足降りたところ、ガラガラッと来た。不意をつかれて私は階段をまっさかさまにころげ落ち、階段の下に置いてあった四斗樽の鏡をプチ抜いて酒漬けになった。私はすぐに電車道にとび出し、そこに居た三才位の子を抱きあげて、上野の山をさして逃げた。上野で二晩をすごし、み

大杉栄と震災の思い出

なし児になった子供を連れて、東海道線の開通を待つ郷里の名古屋へ無事落ちのびた次第である。

杉藤二郎

度、大杉栄の死を悼むことになり、今日では未曾有の震災が大杉と自分とを結ぶ一本のキズナであったと考

この体験は私の生涯で一番大きな出来事といえるが、まだやんちゃつ気の抜けない血気盛りの若者には、心の底までゆすぶる程の深刻な衝撃ではなかった。衆知の通り、この震災では憲兵隊による大杉夫妻殺害事件、

大杉の翻訳による本、パンフをたくさん読んだ中でも、彼の法律と強権、労働運動に対する考え方には頭のさがるものがあった。感銘を受けた私は、戦後も大杉の遺児・魔子と再々逢い、思い出を語り合ったものである。

亀戸事件、朝鮮人の災難など、さまざまな事件が起き

その彼女も小川正夫と共に今は亡い。

挽歌(10)

ことしは風鈴を吊らないで下さい

去年の九月、私は風鈴をおろして

母の病床のまくらもとにおきました

真夜中に母がならしても

私はすぐに起きなかつた

あまたかと

きこえぬふりをしていた

ひどい熱にうなされながら

母は風鈴をふって

なんども水をほしいといった

三たびに二ど

二どに一どしか

私は起きてゆかなかつた

風鈴をふる手は日に日にほそくなり

風鈴の音はしだいにちいさくなつた

それでもときどき

私はきこえぬふりをした

母のなきがらがはこびだされ

風鈴だけがまくらもとのこつていた

私は風鈴の舌をおさえて

そつとたんすにしまいこんだ

それでも毎晩

風鈴はなつていた

ひとりでになつていた

だが それもしだいによわよわしくなり
とうとうきこえなくなつた

その風鈴を吊らないで下さい

(1972)

風景(10)

玄室をのぞくと

仔犬がとびだしてきた

黒いのが一匹

白のが二匹

昨日今日すてられたのか

まるまるふとっていた

ちぎれるようにしっほをふりながら

どこまでもついてくる

こちらがいそぐと

三匹とも

ぬかるみに足とられては

ころげつまるびつ

必死におっかけてきた

弱つたなあ

たちどまると

たちどまる

むりやり口をあけ

あめ玉をいれてやると

三匹たがいにからだをよせて

夢中でれるるなめている

そのすきに走つた

道はくねくねまがつていた

たちどまり じつとしていると

もう追ってくる気配はなかつた

妙にさびしかった

枯れたすすきがゆらゆらしていた

遠くに葛城の山なみがみえていた

山頂には雲がかかつていた

いつのまにかしぐれにぬれていた

(1972)

部落をかこむ土塀の銃眼から銃口をつきだして狙い撃ちしてくる。

それに手をやいて、敵を包囲しながら攻略できなかつた。

ひとまず休戦となり、暮れかかる夕日を背に浴び、負傷者をはげましながら後方の部落にたどりついたのであった。

逃げまわる農家のニワトリを捕え、羽毛をむしり、ぶつぎりにして鍋に投げこむ。夕食当番中のおれに、戦友のAが近づいてきてそっと耳打ちした。

「タカシマよ、今日の銃弾のうなる前線であつたらしくをふり向くと、あのE軍曹があの背中に拳銃の銃口を向けていたんだ。目と目が合い、はっとしたとき、奴はす早く銃口を外らした。奴の青ざめた顔。戦闘のどさくさにまぎれておれを殺そうと狙っていたにちがいない」

「おれは奴に憎まれている。でもしぶとい奴だ」
聞いているおれもかすかにうめいた。

それにしても軍曹がAをなぜそれほどまでに憎悪するのだろうか。
大よそのいきさつは気づいていた。
まだ内地の兵営で訓練中のころ。

軍曹は初年兵であつたAを何かにつけて意地悪くいじめぬいた。
階級をかさにきて

顔が變形するほど殴打することもたびたびであつた。

その後部隊は内地から戦地に移動し

この僻地にやってくるまで、早や半年を経過していた。

戦地にきてから軍曹はしだいにAをおそれはじめていた。

「復讐されるかもしれぬ」

「復讐してくるにきまっている」

Aはしかし復讐など考えてはいなかつたのだ。

だが軍曹は、かつての自分の行為をおもいおこすたびに、自らを被害妄想の暗闇の渦のなかにおとし入れていった。

「殺られる前に殺ってしまおう」

それ以来、機会を狙っているようであつた。

それにしても軍人勅諭、戦陣訓など、きびしい軍律のなかで、個の個に対する憎悪が陰湿にくすぶりつづけ、

生死さまざま敵前の恐怖の時間のなかでも、しつように狙いつづけていたのだろうか。

グアムからの手紙

1968年に私が加入した時は、組合員のほとんどが五五歳以上の人皆をを守るV献身的な古参連であったと思います。現在、そのほとんどが三

S・シャピロ

五歳以下です。私が参加した時は仕事

アガナ/グアム

事のほとんどが宣伝と教育でしたが

1974・8・5

今は合衆国で、英国で、そしてグア

親愛なる同志福田武二

ムで活発に組織化しつつあります。のほとんどを費している、いわゆる

同志トミーがあなたに手紙を書く

ムで活発に組織化しつつあります。のほとんどを費している、いわゆる

が翻訳して、あなたが印刷してくだ

このグアムではじめて、具体的な「ラジカル」な黒ヘル派についての

さったパンフ/外国人労働者よ、注

の目標は観光バス産業です。グアムト系の組合はないのですか？同志ト

意せよVを書いた者です。このパン

の観光ガイドのほとんどが日本人でミーは、あなたが 年代に工

フは多いに役立てられることでしょ

すが、私は彼らにむけて短いピラを場接收に関連したと話してくれまし

う。

書きたいと考えています。 た。

すてにご存知のように、私はI W

グアムに観光産業が出来て以来、 さて、もうそろそろ筆を置いた方

W(世界産業労働組合)の立場をと

多くの日本人労働者がやってきまし がよさそうですね。重ねて私達の小

っています。I W Wはブルジョア歴

た。(観光客のほとんどが若いホワ 冊子を印刷して下さったことに感謝

史家の言にもかわらず、いまだ死

イトカラーの日本人労働者です。) します。当地でのニュースについて

んではないないし、一度も死んだこと

私たちは、すべての労働者等に―― は今後ともお知らせするつもりです。

もありません。実際、私たちは再興

その国籍のいかんを問わず――組合 では……

(ルネサンス)をなしつつあります。に加入してもらいたいと思っ

ている

翻訳(草)